

「戦う操縦士」について

徳 村 佑 市

1939年9月1日、突然ドイツの大軍が国境を越えてポーランドに攻め入り、これを見たイギリスとフランスがただちにドイツに対して宣戦を布告し、こうして第二次世界大戦がはじまった。アントワヌ・ド・サン＝テグジュペリ大尉は動員されることになっているトゥールーズ＝フランカザルへ赴く前の数日パリにとどまつて、戦闘機中隊へ配属されるよういろいろ奔走する。又トゥールーズへ赴いてから後も毎日パリへ電話して奔走する。しかし医師会議は飛行時間数千時間に及ぶこの空の巨匠を診察し、室内曲技飛行をやらせてから、彼は不適格だとの宣言を下してしまつた。爆撃訓練本部の司令官ダヴェ將軍はサン＝テグジュペリのためいろいろとりなし、このとりなしによつてようやく飛行可能として支持された。それで彼は前線行きを志願した。11月3日彼は2/33大隊に配属される。これは総司令部直属の三つの戦略大偵察飛行大隊の一つである。彼はそこで勤務につくが、友人達は彼を前線から遠ざけるために民間や軍の高官にとりなしをたのんでいた。つまりパイロットは何千人でも養成できるが、サン＝テグジュペリのような輝かしい飛行歴をもつた著名なパイロットは一人しかなく、彼のような人物を再びつくり出すのは困難だといふのである。又エール＝ブルーの支配人ディディエ・ドーラは元部下の元ジュビー飛行場長のサン＝テグジュペリが元のように民間航空へ派遣され、そこの勤務に移されるよう航空省へ要求していた。前者の運動、知らない人々の署名でおおわれた文書の内容を受諾しないことは容易であつたが、ドーラは相変らず彼にとつてはおやじであるのでこの方をことわるのに骨がおれた。しかし彼は前者も後者もことわつてしまつた。それほど彼はこの戦争に参加することを自分の義務と考え、それに意義を認めていたのである。彼は又2/33大隊の一員として戦争に参加するかたわら、暇を見つけていろいろな発明にとりつかれていた。彼は戦時の偽装方法を考案し、トゥールーズで実験されることになつてはいたが戦況がこれを不可能にした。又彼は航空航法測定装置を考案し特許をとつた。これはアメリカ人が数年後に作つて使用した有名なデッカと同類のものである。1939年——40年の冬は寒さがきびしかつた。彼は基地で暇な時デッサンをかいた。それは「星の王子」のデッサンの兄弟で蝶を追う子供の姿であつた。1940年5月1日ド

ドイツ軍の攻撃がはじまった。動乱が北フランスに達するにつれて2/33大隊は後退を余儀なくされた。5月18日、2/33大隊はル・ブールジェに宿営する。5月22日、サン＝テグジュペリは困難な偵察をやつてのけ軍令をもつて表彰された。その翌日彼は総理大臣のポール・レイノーに迎えられ、合衆国へ講演に行き、約束を破らないために身を犠牲にしたフランスの立場を弁護するよう求められるが、彼は戦友を見捨てるわけにはゆかないことを理由にこの要請を拒絶する。大量避難がつづき、大隊は毎晩新しい土地へ向け後退する。「戦う操縦士」の中にえがかれているところの霰弾の一斉射撃のさなかのアラス上空の任務が位置するのはまさにこの五月末の退却の真最中、敗北の真最中のこの時期である。パリも陥り、ブロー、シャトールーと移つた後大隊はジョンザック（西仏）に達し、そこからアルジェに移り、そこで休戦を迎えた。サン＝テグジュペリは一時フランスに帰り、まもなくポルトガル経由で合衆国へ赴いた。「戦う操縦士」は1942年のはじめアメリカとフランスで同時に出版された。アメリカ版の表題は「アラスへの飛行」となつていた。

以上が「戦う操縦士」のえがいている時期の簡単な背景である。勿論この作品は題名の示す如く戦争を取り扱つた作品であるが、それは通常の戦争文学とは異つて禅の悟りにも似た深い精神的開眼を取り扱つている。以下少しくその構成と内容を分析して見たい。

サン＝テグジュペリ大尉とデュテルトル中尉は隊長から呼び出しを受け、アラス上空での敵陣地の偵察の任務を与えられる。時はまさに五月、フランス軍は退却の真最中、敗北の真最中である。サン＝テグジュペリはフランス全軍に残された五十組の偵察大飛行部隊所属の塔乗員である。三人ずつの塔乗員からなる五十組、内二十三組が彼の2/33飛行隊に属している。山火事を消すためにコップで水をかけるようなやり方で塔乗員を犠牲にした結果、わずか三週間の間に二十三組のうち十七組を失つてしまつた。それでもなお彼は偵察の任務につかねばならないのだが、実際には彼のもつてくる情報など気にとめるものはないのである。彼自身もそれを承知している。たとえ情報を得てきてもどこへも伝達出来ないのである。道路は皆あがきのとれない程雑踏しているし、電話は不通である。でなくても司令部は急遽他に移転して行方不明である。ドイツ軍の進撃は早く、敵軍の配置に関する重要な情報を教えてくれるのは敵軍自身だという有様である。このような状況の中で彼は命ぜられた任務の不条理を痛感する。そして彼は戦争について、死について、犠牲について、フランスについて統一的思考を喪失し、彼の真実は千々に砕け去つてその断片についてしか考え得なくな

っていることを感じ、もし万一生きて帰れたら、夜を待つて文明や、人間の運命や、自国に於ける友情の味などについて瞑想し、自分が何故死なねばならないかについて考えようとちかう。そして彼は「精神」の働きは間歇的で「知性」の働きは恒久的だと考える。「精神」は物を考察するのではなく、物を結びつける意味を考察するのである。その「精神」は完全な洞察から完全な盲目にまで揺れ動く。自分の地所を愛するものがそこに雑物の下らない集積しか見出さない時がくる。自分の妻を愛するものが愛情のうちに心配ごとと不如意と束縛しか見出さない時がくる。音楽を享樂していたものがそれを聴いて何も感じなくなる時がくる。そのように自分には自分の国がまるでわからないものになつてゐる。一つの国というものは「知性」が把握し得る土地や風俗や物資の総和ではないのである。そして自分は「精神」の働きを見失つて自分の国が理解出来なくなつてゐる。人間は断片化し、総体として把握出来なくなつてゐると考える。

出撃を前にして犠牲的任務の不条理を痛感し、故障で出撃が不可能にならないかという希望的観測を抱いていた彼も、いざ飛行機を運転しはじめると気持がととのい、行為に入らない前の宙ぶらりんの状態が生み出す苦悩が彼の心から消える。彼は方向を維持するためにコンパスを制御し、プロペラや油の予熱を制御するものとなり、直接の健全な心配事が心を占めるようになってくる。こうした行動の中で顔のない未来におびやかされることを克服、未来を作るものとなるのである。彼は出撃を前に服装をととのえていた時感じた不安感をもはや感じなくなつてゐる。又義務感をも感じなくなつてゐる。西欧とナチズムとの闘争はハンドルやその他の機械を操作する行為と化している。このように彼は批判することよりも先ず「参加」することを貴ぶのである。彼は飛行機を操縦しながら敵の戦闘機が待ち構えているアルペールを無意識に避けようとする。これは年老いた馬が彼を一度おそれさせた障碍を無意識に避けようとするようなものである。それは彼の肉体がそうするのであつて、彼の「精神」がそうするのではない。「精神」が放心している時に肉体がそれを利用するのである。彼はこのように反省する。そして彼はもう故障が任務をやめさせてくれるような事態になることを期待していない。それは恰も学校の生徒がずる休みを期待するようなものである。ずる休みは生徒を影のような存在にしてしまう。真の時間、悲惨や忍耐や喜びや後悔で豊かな濃密な生活はずる休みをしなかつた者の側にあると彼は考える。それは彼の「参加」することを尊ぶ人生観のあらわれでもある。

「知性」はこの出撃が不条理なものであることを説明する。人は彼に何度も言つた。ここ

またはあそこにあなを配属させなさい。そこがあなたの場所だ。そこならあなたは飛行中隊にいるよりももつと役立つだろう。飛行士はいくらでも作り出すことができる。しかしこれは「知性」の推論である。誘惑とは「精神」が眠っている時に「知性」の理屈に従うことである。彼は「知性」の理屈がもつともであることを知りながら本能的にそれを克服して出撃した。そして幸いにして生還したら夜の村を散歩して考えて見たいという前の希望にふれ、そしてその時には自分の行動の真の理由を見出すであろうと考える。そして真の視覚に到達するためには先ず「参加」せねばならないと彼は考える。彼は敵の戦闘機に追撃され、危くそれをのがれるが、上空で氷つたラダーをゆるめようと努力したために呼吸困難に陥り、失神しそうになる。しかし死の間近まで行きながら、人のいう髪を白くするという苦悩を感じない。そのことから彼は飛行機をうち落され、落下傘で降下した僚友のサゴンのことを考える。サゴンは危機に直面してサゴンを知っただけである。死ぬ者は自分があつたように死ぬ。普通の坑夫の死において彼は死ぬところの普通の坑夫である。文学者が発明するようなものすごい心神喪失などどこにもないと彼は思う。彼はスペインで、数日を要した発掘作業の後、空雷で破壊された家屋の下から一人の男が救い出されるのに立ち会ったことを思い出す。人々は彼にいろいろのことを尋ねたが、人々が本当に問いたかつた質問、その男が危機に遭遇した時、「その男は誰であつたか。」「誰がその男のうちに現れたか。」という質問に対してはその男は「自分自身」という以外には答えられなかつた筈だと彼は思う。突然の啓示が運命を分岐させるように見えることがある。しかし啓示とはゆつくり準備された道の「精神」による突然の洞察にすぎない。それはゆつくりと文法を学び、文章法を学び、或日突然詩が心をうつようなものである。そして今日の夕方何かが自分に現れるならば、それは目に見えない建築に自分がせつせと重い石を運んでいるからであろう。自分は自分以外のものが突然現れることについて考える権利はないわけである。その他のものも自分が構築しているわけであるから。そして彼はこのゆつくりした準備以外には戦争の冒険から期待すべき何物もないと考える。ここに彼の本質的な考え方が良く現れている。「精神」の働きは間歇的であつて、「精神」が盲目になり眠っている時人は「知性」の理屈に誘惑されがちである。しかしそれを克服して先ず「参加」することにより、見えない建築に石をせつせと運ぶことによつて人は最後に「精神」による真の洞察に到るのである。彼があらゆるものが犠牲的任務の不条理を説きつける中、でそれに負けずに任務についたのはこの態度から由来しているのである。

そして彼は飛びつづける。身仕度の際の感動はもう遠い過去のものとなつている。アラスはまだ遠い未来だ。戦争の「冒険」はどこにあるのかと彼は考える。「冒険」とはそれがうちたてる絆や、それが置く問題や、それがひきおこす創造の豊かさに基づくものである。自分がかつて民間航空路の創設や、サハラ砂漠の不帰順地帯や、南アメリカで真の「冒険」を生きたが、戦争は真の「冒険」ではなく、その代用品に過ぎない。戦争は「冒険」ではなくチブスのような病気である。もつと後になつて戦争の唯一の「冒険」はオルコントの自分の部屋のそれであつたことを理解するだろうと彼は考える。オルコントに宿営していた時彼は粗末な一部屋にいた。暖い寝床から抜け出して寒い空間を横ぎつて暖炉の火をつけに行く。火がつくと又床に戻る。そして火が盛んになると床から出て暖炉のそばに行く。彼は三つの地方、三つの文明を経験したわけである。眠りのそれ、砂漠のそれ、火のそれ。最初は母の胸にとりすがる幼児の大切に保護された肉体であつたものが、やがて苦しむために作られた兵隊の肉体となり、次には火という文明の喜びを受ける大人の肉体となるという三つの肉体の「冒険」を経験したわけである。単なる旅行者としてここを訪れる人はこの粗末な部屋にこのような豊かな三つの地帯があるとどうして想像出来よう。ここには真の「冒険」があつたと彼は考える。しかしこのアラスに向う機上には「冒険」を信じさせるような寒い部屋はない。ここには全き空虚以外はもうないと彼は思う。

敵は戦車の機動力を使つてフランス軍の組織を破壊してしまつた。フランス軍は村を焼き、橋を破壊し、兵士を殺して抵抗しようとするが、それは敵の進出をおくらせないので殆ど意味を持たない。彼らは戦争の遊戯をするためにのみ村を焼き、橋をこわし、兵士を死なしめているに過ぎない。村を焼くことはその村のもつ意義と釣合わねばならないのにそれはもはや認められない。こういう状態では信じ、戦い、勝つふりをしてしても無駄である。そこから喜びを引き出すことはむづかしい。自分の中で何が故障しているのかと彼は考える。他の状況において、現在自分にとって抽象的で遠いものが自分を揺り動かすことが出来るというのはどこから来るのか。或る一つの身振りが、或る運命に一生つづく程の波紋をえがくというのは何によるのだろうか。もし自分がパストゥールであるならば顕微鏡のスライドが処女林よりもずつと広大な土地のように見え、その上に身を傾けて「冒険」の最も高い形を自分に生きさせる程滴虫のしぐさが感動的になるのはどこから来るのかと彼は考える。そして彼は子供時代の家のことを思い出し、その玄関と二人の叔父につながる思い出を語る。そして自分が今見るあの点は自分の下一万米にある人間の家に違いないが、自分はそれから何物を

も受けとらないと思う。そしてそれは多分田舎の大きな家であつて、二人の叔父が歩きまわり、子供の意識の中に海の広大さと同様寓話的な何かをゆつくりとたてているかもしれないと思う。しかし一万米の上空から自分は一州ほどの範囲の土地を発見するが、そのくせ一切のものが自分を息苦しくする程縮小している。ここで自分が享有している空間は、あの黒い点の中で自分が享有した空間よりもずつと狭いのだと思う。彼は自分が「ひろがり」の感情を失い、「ひろがり」に盲目になつているのだと気づく。しかし彼は渇きのようにそれを欲しているのである。彼は考える。偶然が愛を目ざめさせると、その愛にしたがつて総てが人間の中に秩序だてられる。そして愛は人間に「ひろがり」の感情をもたらす。サハラ砂漠に住んでいた時、アラビヤ人達が夜自分達の火のまわりに突然現れ、遠くから危険が近づくつあると告げると砂漠は結ばれて一つの意味を持つ。この伝令が「ひろがり」をたてたのである。感動的なものは「ひろがり」の感情である。真の「ひろがり」は目に与えられるのではなく「精神」にのみ与えられる。それは言語の価だけの価がある。何故なら事物を結びつけるのは言語であるからと。ここで「精神」と「ひろがり」の関係がはつきりするのであつて、人が「精神」に目ざめるとき「ひろがり」の感情を獲得するのである。又人が「精神」に目ざめた状態は「冒険」とも呼ばれ、それは「ひろがり」を与えるものである。彼は又考える。こう考えてくると「文明」とは何であるかがよりよくわかるように思われる。「文明」とは信条や習慣や知識の遺産であつて、数世紀の間にゆつくりと獲得されたものであり、しばしば論理によつて解しえないが、道がどこかにみちびくと同じくそれ自身によつて正当化されるものである。それらの信条や習慣や知識は内面的な「ひろがり」を人間に開いてくれるからである。そして「文明」が強力であれば人間が働きかけずともそれは人間を満すのである。その最高の形は次のようなものである。祈つているドミニク教団の僧には「稠密な存在」がある。この人は平伏して身じろがずにいる時ほど人間らしいことはないのだ。顕微鏡の上に息をこらしているパストゥールには「稠密な存在」がある。パストゥールは観察している時程人間らしいことはない。その時彼は進歩し、急いでいる。その時彼は動かないけれども巨歩をすすめている。そして彼は「ひろがり」を発見する。同様に下絵を前にして動かず黙つているセザンヌは「貴重な存在」を持つている。彼は黙り、ためし、判断する時程人間らしいことはないのだ。その時彼の画布は海より広いものとなる。ここにその最高の形があると彼は考える。ここで見られることは人間が「精神」に目ざめる時、彼は「ひろがり」を発見し、そしてそれによつて人間は「稠密な存在」となるのである。同様に「

文明」とは人間が「精神」に目ざめた時獲得するものであつて、それは人間に内面的「ひろがり」を与えるものなのである。子供時代の家によつて与えられた「ひろがり」、オルコントの部屋によつて与えられた「ひろがり」、顕微鏡の視野によつてパストゥールに与えられる「ひろがり」、詩によつて開かれる「ひろがり」、これらは「文明」のみが与えうるものである。というのは「ひろがり」は「精神」に対してのみであつて、目に対してあるものではないからであり、又言葉なしには「ひろがり」はないからである。だが今はどうして自分の言葉の意味を活気づけることが出来るか、「精神」に目ざめ、「ひろがり」を獲得することが出来るかと彼は考える。いつさいがごつちやになつている今、園の木が或る一家の数世代を運ぶ船であると同時に、砲兵の射撃の邪魔物である今、どうしたら「精神」に目ざめ、「ひろがり」を獲得することが出来るかと彼は考える。

彼は飛びつづける。そしてドイツ軍に追われて村人があわただしく避難して行く様、道路の混雑、混雑にまきこまれて戦いを見失う兵士、司令部の混乱、もはや何処へも命令を伝達出来ない大臣など敗戦の有様をのべる。そして彼は考える。まだ抵抗しているものにとつても、もはや抵抗しないものにとつても、敗れたフランスの顔はもつと後に沈黙の時間のみ現れるだろう。しかし現在は謀反したり、荒廃したりする俗悪な細部に人は精魂をすりへらしている。即ち故障したトラックや、混雑した道路や、故障したガスのハンドルや、任務の不条理に精魂をすりへらしているのである。この敗戦の結果にもとずいてフランスを判断すべきではない。犠牲への同意にもとずいてフランスを判断すべきであるのだ。理論家は敗北を警告していたが、それにも拘らずフランスは参戦した。それは「精神」が「知性」にうちかつていたためである。敗戦はそのみにくさにも拘らず、更生への唯一の道を明示しうるのだ。樹木を創造せんがためには一個の種子を腐敗に任ずべきことを自分は知つている。抵抗の第一歩はそれが遅すぎる場合常に失敗する。しかしそれは抵抗の目覚めである。一個の種子からのように一本の樹木がそこから多分現れるだろう。フランスの役割は世界が協力も戦いもせずに審判役にまわつたために轢死を買つて出、暫時沈黙の中にうまる役割であつた。突撃には先頭にたつ兵士がいる。その兵士は必ず死ぬのである。それがフランスの役割であつた。だから敗戦のみにくさに基づいてフランスを批判すべきではないと彼は考える。自分達に戦争を必要とした精神的意義を外にすれば、依然としてこの戦争は奇妙な戦争である。自分達は敵に向つて飛んで行く。自分達は死を甘受している。しかし何の為に死ぬのかと彼は考える。「知性」の敘述より高い「真理」がある。自分がまだそれをつかむことなしに従

つているあるものが自分達を貫いて通り、自分達を支配しているのだ。そして自分達はそれに従って動いているのだと彼は考える。

あらゆる悪条件にも拘らず自分は希望を抱いていた。そしてこの上ない保護の感情を再び見出すために記憶の中を子供時代までさかのぼったりした。たしかに自分は戻る希望を抱いていたと彼は考える。しかしそれと同時に彼はあることが起るであろうことを知っていた。そのある事が今はじまつたのである。所はまさにアラスの上空。地上砲火が一斉に光る線となつて彼の方に昇つてくる。地上砲火の弾幕の中にとらえられて彼は「肉体」についてのある「明証」に達する。日常の生活において人は「明証」に盲目である。「明証」が現れる為には条件の切迫が必要である。人は自分の「肉体」を大変世話してきた。人はそれに着物を着せ、洗い、介抱し、剃り、水を飲ませ、食物を与えた。人は自分をその家畜と同一視してきた。人は彼とともに苦しみ、彼とともに愛した。人は彼についてそれは自分であるという。ところが突然この幻想が崩れる。すると人は「肉体」を問題としない。怒りが少々激しかつたり、愛が熱狂したりすると早速この名代の連帯関係がもつれ出す。君の息子が火事の中にとらえられたら、君は彼を救うだろう。君には焼けることなどどうでもよいのだ。君は君にとって大変重要であつたことに執着していない自分を発見する。君は君の行為そのものの中に宿っている。君の行為それが君だ。君の「肉体」は君のものだが、もはや君ではない。君とは。それは敵の死であり、君の息子の救助である。君は交換される。君はその交換で損をするという感じを抱かない。君の手や足は。それは道具である。そして君は君のライバルの死、息子の救助、病人の治癒、もし君が発明家ならば発見とかえるのである。君の意味がまばゆい程はつきり現れる。それは君の義務であり、君の怨恨であり、君の愛であり、君の誠実さであり、君の発明である。君は君の中に他の何物をももはやみつけない。火は肉を失わせたばかりでなく、同時にまた肉への礼拝をも失わせた。自分が最前飛行服に着かえていて、自分の肉体のために恐怖を感じていた時、自分が下らぬことに気を勞しているとどうして予見出来ただろうか。自分は人は死を恐れると想像していた。しかし人は不測を、爆発を、自分自身をおそれるが死はおそれない。人が死に出会う時にはもう死はない。「肉体」が解体する時「本質」が現れる。人間は関係のきずなにすぎない。関係だけが人間にとって重要なのであると彼は考える。「知性」は彼に自分の受けた任務が不条理なものであることを説得した。しかし彼は「知性」の叙述より一段高い真理があることを信じ、「知性」の誘惑を押えて先ず「参加」することにより、「精神」による洞察に達し得ると信じてい

た。そして自分の義務に従って先ず「参加」し、目に見えない建築にせつせと石を運ぶことによつて、ここに「肉体」についての明証に達し、人間の本質についての洞察を得たのである。そしてここで洞察された本質は禅の悟りに近いものであつた。鈴木大拙はその著「禅とは何か」の中で次のように言っている。「…私共の生活は恰度網をひろげたようなもので、私共はそのときどきの心持でその網のある一点の結び目に立つていると見てよい。それはどのような意味かという、普通の網というものは四つの結び目から出来ているが、吾々の掛けて居る生活の網の結び目は、必ずしも四つの結び目から出ていると云う訳でなくして、無数の目が出てつながり合つて居るのである。その意味から云うと、その一つの結び目を上げると、それから全世界がそれにつながつて上つて来ると云つていいのである。詰り仏教で云う一つの小さな芥子粒の中に須弥山が入ると云う、須弥山と云うのは大きな山である、その上に世界が重なつて居ると云う、その大きな山が一つの芥子粒のようなものの中に納まると云うのである。もつとも大は小を兼ねると云うことを云うが、小は大を兼ねるとは謂わない、併し仏教の方では斯う云う非常識なことをよく云うのである。これをこんな意味に解することも可能である。それは網の目の一つの結び目を引きあげると、そこにすべての世界が入つて来るんだと云うことに見て、芥子の種と須弥山との関係を空間の関係に見ないで、網の結び目の関係に見ると、須弥山も容易に芥子粒の中にはいつて来るではなからうか、問題はどこに中心をおくかに在る。そしてその中心点の一つと云う風に必ずしもきまつていない。一つの中心は他の中心に繋つている。つまり網そのものが全体に中心である。それで今私が立つて居るところに、全世界をあげて悉く皆ちやんとつながり合つて居ると云うても宜い。天上天下唯我独尊と云うことは釈迦が云うたと云うが、その天上天下唯我独尊と云うようなこともそういう意味合に解すると云うとよく判るかと思う。とにかくそういう塩梅に吾々はいろいろと重々無尽に、次から次へと無窮に亘つて居るところの、この網の目の関係に立つて居るのであるから、その関係だけあつて、その以外の何もないと云うてもよいのである。それを一切空であると仏教は教える。」このように彼が「精神」に目ざめて達した洞察、明証は禅の悟りに似ている。彼は「知性」の誘惑に耳をかさず先ず「参加」することを尊んだが、このように文法を学び、文章法をまなび、苦しい試煉をへてこの洞察に達したのである。

彼はアラス上空での任務を終えて基地へ引き返すのであるが、自分がもう少し早く引き返していたら、自分の心に昇つてくる美しい愛情を知らなかつただらうと彼は考える。自分は

家へ戻るのである。2/33飛行大隊は自分の家である。自分は自分の家の人々を理解する。自分は非常な明証の感情でこの「共同体」を感じる。彼は自分を僚友ガボアルやオシュデに結びつける「共同体」を感じる。そして自分の著書のことによれ、それは自分に知識人、傍観者、抽象的な証人の外観を与えることも出来たであろうと述べ、証人という仕事は自分は昔から嫌いだ、「参加」しないなら自分は何であろう、自分は存在する為に「参加」することを必要とすると考える。自分は仲間の美質で自分を養っている。ガボアルやオシュデは彼らの仕事や職業や義務に対する絆の網状組織である。そして自分は彼らの「存在の稠密さ」に酔う。何物もこの友愛を傷けないであろう。自分は「知性」の働きや意識の勝利をけなす積りはない。しかし絆の網状組織からなる「実体」に向け、視線にすぎないならば人間とは何だろう。その「実体」を自分はガボアルやオシュデの中に発見する。作家としての活動から自分が享受し得る利得、例えば万一2/33飛行大隊における自分の職務が気に入らなかつた場合、他の職務につくためにそれを捨てることも出来るという自由の如きは一種の恐怖をもってこれを拒否するものだ。それは存在しない自由にすぎない。フランスはその「実体」のない知性で亡びかけたのである。ガボアルは存在する。彼は愛し、嫌い、楽しみ、不平を言う。彼は絆で出来ている。自分は共通の幹の中に我々皆をすえる職業の義務を賞味する。自分は2/33飛行大隊を愛する。それは自分がそれに属するからであり、それが自分を養い、自分がそれを養うのに貢献しているからである。自分がアラスから戻りつつある今、以前にもまして自分の飛行大隊に属している。自分はさらに一つの絆を獲得した。自分は沈黙の中で味うべき「共同体」の感情を自分の中に強めた。今日の散歩から自分は戻らないかもしれなかつた。それは少々より多く僚友のテーブルに座り、彼らとともに沈黙する権利を自分に与える。この権利を買いのには高くつく。それは存在する権利であると彼は考える。

自分は大変かわつたと彼は考える。敵の侵入を前にしてこのごろ自分の心は苦かつたが、しかし自分は間違つていたと。そして心の中でアリアス隊長に呼びかけ、隊長はじめ自分達はその精神があいまいとなつた義務という文字にすがりついていた。隊長は自分達を本能的に勝利へではなく、立派になるためへとかりたてた。自分達は不平を抱いたが、隊長はその意味のかくされている儀式を救つたのである。隊長よ、あなたは正しかつたのだと彼は思う。今基地へ帰りつつあるのだが、自分がその上を飛んでいる群集をアラスの上空で理解したと彼は思う。自分は自分が与えるもののみに結ばれる。自分は自分がめとる者のみを理解する。自分はこの群集のものであり、この群集は自分のものだ。時速 530 Kmで、高度 200 m

で雲の下に出た彼は、一目で家畜の群を数え、集め、結びつける牧人のようにその群をめとる。その群はもはや群集ではなく国民である。どうして自分が希望なしでいられよう。敗北の腐敗にも拘らず、自分は自分の中に結婚式から出たようにあの重々しい持続的な歓喜を抱く。支離滅裂の中にひたっているが自分は勝利者のようだと彼は思う。自分はデュテルトルと機関銃手を許された限界の彼岸につれだしてきたところだ。数々の辛酸をなめ、総てを犠牲にした。そしてそこで十年の瞑想で学んだより以上のことを我々について学んだ。そしてとうとうこの十年の僧院から出た。自分達は敗戦全部をひとまたぎする。眼下の群集たちは難儀しているが、自分達には仲間の処へかけつけることが許されている。自分達は祝祭の方へ急いでいるように見える。自分達はそこで夕べのパンのうちに仲間たちと同じ気持で生きるであろう。アリアス隊長よ、貴隊におけるこの「共同体」を盲人に対する火のように自分は味った。盲人は坐り手をのぼす。彼は自分の喜びが何所から来るのか知らない。任務から知らない味の御褒美を楽しみに自分達は帰ってくる。それは要するに「愛」にはかならない。それは真の「愛」、すなわち人間を立派にする絆の網の目であると彼は考える。このように彼はアラスの上空で人間は関係の絆にすぎず、関係だけが人間にとって重要であることを悟った。そして自分がこの絆の網状組織より成る「実体」を持たない抽象的な証人、視線にすぎない知識人であることを厭い、絆の網状組織で重い「実体」のある人間であるのを知るのである。そして又自分がその絆によって2/33飛行大隊の僚友や、又アラスから帰る途中彼がその上を飛んだ避難する群集たちに結ばれ、彼らと「共同体」をなしていることを知るのである。

無事に基地に帰って来た彼はある農夫やその家族とともに食事をしながら、自分が「共同体」によって結びつけられているのはひとり同僚達にばかりではなく、彼らを通じて国全体にも結びつけられているのを知る。彼は出撃する前にもし無事に帰ったならば、この村との対話を通じて瞑想し、自分が何故死なねばならぬかを考えようと約束していた。しかし無事に帰ってきた今、自分がただ自分の国の人々に結びつけられているのを感じる。彼らが自分のものであるように、自分は彼らのものだと思ふ。農夫がパンを分配した時、彼は何物も与えなかつた。彼は頷ち交換した。同じ小麦が自分達の内部を循環したのだ。農夫はそのために貧しくなつたのではなく、「共同体」のパンと変つたよりよいパンを食べることによつて富んだのだ。今日の午後任務遂行のため、自分が彼らのために離陸した時、自分も又彼らに何物も与えはしなかつた。自分達飛行隊員は彼らが戦争に払う犠牲の一部なのだと思ふ

考える。彼らが絶望しているように見える時自分が希望を抱いているとしても、それは自分を彼らから区別する理由にならない。自分はただ彼らの希望の部分なのだ。たしかに自分達は敗北者である。しかし自分は勝者の平静さを経験している。もちろん自分達は勝利感を理由づける言葉を持ちあわせていないが、自分達に責任があると感じている。誰も同時に自分が責任があり、絶望していると感じることが出来ない。勝利や敗北にもいろいろあるが、自分の疑うことの出来ない唯一の勝利は種子の力の中に宿るそれである。種子を広やかな黒土に蒔けばそれは忽ち勝利者となる。ただ小麦としての種子の勝利を見ようとするには時をかさねばならない。今朝存在したのは支離滅裂な軍隊と乱雑な群集だけであつた。但し乱雑な群集はそれが結ばれる一つの意識が存在するならばもはや乱雑ではない。仕事場の石はもしそこに伽藍の事を考えるただ一人の人が存在するならば外見的にしか乱雑ではない。黙思の境地に到れば人は自ら種子となる。心の中に建てるべき伽藍を抱くものはすでに勝者である。「愛」又は「精神」だけがこね上げるべき顔を知っている。「知性」はそれに奉仕する場合にのみ役立つのである。作品の重みで重い彫刻家は誤りに誤りを重ねながら創作へ向つて進むであろう。同様にフランスを救う為にも自分は総ての「愛」をもつてその方向へ思いをいたさねばならない。海はその思いを致す処へは何処へでも浸みこんで行くのである。自分は盲人に対する火のたとえをよりよく理解する。盲人が火の方へ歩むとすれば、それは彼の中に火の必要が生れたからだ。火はすでに彼を支配している。もし盲人が火を探すとすればすでに彼がそれを見つけたからである。同様に彫刻家の歩みが粘土に近づいたとしたら、その時すでに彼は作品を獲得しているのである。自分達も同様である。自分達は自分達の絆の熱を感じている。だからすでに勝利者なのだとは彼は考える。

自分達の「共同体」はすでに感じ得るものとなつている。それに参加する為にはそれを現さねばならぬ。これは意識と言語の努力であるが、自分達は何よりも前に自分達があるところのものを否定してはならないと彼は考える。そして村の沈黙の中で石垣に背をもたせて次のように思う。自分は彼らの一員である以上、彼らがたとえどのような事をしようとも自分は彼らを否定はしないつもりだ。自分は決して他人の面前で彼らの非をとかない心算だ。彼らの弁護が可能な場合には自分は彼らを弁護するつもりだ。もし彼らが汚辱で自分を被う場合には、自分はその汚辱を我と我が心に秘めて沈黙を守る心算だ。その時自分がたとえどのように考えようと、自分は決して彼らの非を鳴らす証人としては立たない心算だ。一人の夫は隣り近所を軒並みに廻り歩いて、自分の口から妻がすべただと言ひふらしたりしない。そ

れをしたのでは彼の名誉は救われない。何故かというに彼の妻は彼の家のものだ。彼女を否定して自分が高尚になることは出来ない。彼がその怒りを発する権利を持つのは一旦我が家へ戻つてからのことだと。つまりそれがどんなに自分に屈辱であるとしても自分はこの敗北の連帯責任を絶とうとは思わない。自分はフランスの一員だ。フランスはすぐれた人物を生んだが、つまらぬ人間も生んだ。その一方との脈絡を認めるが、他方との脈絡を否定するというのでは安易すぎるように思われる。自分は敗戦の責任を自分とは意見の違つた人々に転嫁したりしない。自分がもし自分の国の為には敗戦の屈辱を甘受するつもりなら、自分は国に向つて働きかけることも出来る。ただ自分達が敗戦の屈辱を拒むとなると、国はめちやくちやに崩壊し、自分は死んだ者以上に無益なものとなつてただ一人意気揚々と濶歩する筈だ。存在する為には責めを負うことが必要である。自分がフランスの一員なりと感ずるようになって以来、他のフランス人を責める気がしなくなつたと同様、フランスも亦世界の責任を問うべきだとは考えなくなつた。世界がフランスを見殺しにしないよう、フランスは世界を一致させる共通の尺度を提供することも出来たわけだ。だから世界が審判役に廻つてフランスを見殺しにしたという自分の前の非難を否認するものだと彼は考える。

こうして彼は「精神」に目ざめ大きくなつたわけだが、彼は自分が大きくなる為には戦つていゝものが自分の中にあり、自分の中に自分が戦つてゐる個人と、大きくなるどころの人間をどうにか区別するためにこの困難な旅が必要であつたのだと思う。こうして彼は苦しい経験を通じて「個人」と、それをかりる「人間」を区別することを学んだのである。「人間」に目ざめた目から見ると論戦の真実にはもう満足出来なくなる。「個人」は通路にすぎないから「個人」を責めても何もならない。敗北は個人の破産として現われるが、文明は人間をねるものだから、自分のものとする文明が個人のあやまちによつて脅されるなら、その文明は何故もつと別種の個人を作つておかなかつたかとの疑問を持つことも許されるわけだと彼は考える。このようにアラスの上空で人間は関係の絆にすぎず、関係だけが人間にとつて重要なものを知り、自分が僚友や国民に絆によつて結びつけられ、「共同体」を形成していることを悟つた彼は、その「共同体」を構成する原理がいかなるものであるかに考察を進めるのである。ここで個人を作りあげてゐる文明が問題になつてくる。一つの文明は宗教と同じように信者の懈怠を訴えるようになってきたらそれは自分自身を非難していることになる。自分の文明はかつて力があつたが、今日では力を失つてゐる。自分が敗北の諸原因の根元を払い退けようと思つたら先ず失つた酵母を見つけねばならぬ。こういうわけで彼は「共同体」の原

理をさぐり、文明のあり方の中に自分を勝者とするものが何かを探ろうとするのである。彼は村の意味深い沈黙の中で考える。アラスの射撃が皮を破つたのだ。この一日中自分は自分の中に住居を準備した。自分は気むずかしい管理人であつた。即ち「個人」であつた。しかし「人間」が現れてあつさり自分の位置に腰を下ろした。そして今夜自分に住む「人間」が仲間を枚挙してやめない。国民や種族の公約数である「人間」。自分の文明においては自分と異なる者は自分を傷つけるどころか自分を豊かにする。我々の一致は我々を越えて「人間」の中に基礎づけられる。このようにして2/33飛行大隊に於ける自分達の夕の議論は自分達の友愛を害するどころかそれを助ける。同様に「人間」の中にはフランスのフランス人とノルウェーのノルウェー人を見出される。「人間」は彼らをその一致の中に結びつけ、同時に矛盾なしに彼らの特殊な習俗を高揚すると彼は考える。自分の文明は「個人」を通じて「人間」の崇拜にもとずいている。それは石を通じて伽藍を区別することを教えたであろうように何世紀もの間「人間」を示そうとした。それは「個人」を超越した「人間」を説いてきた。というのは自分の文明の「人間」は人間達から定義されない。「人間」によつて定義されるのは人々の方である。「人間」の中には総ての全き存在に於けるように、それを構成する材料が説明しないものがある。伽藍は石の総体とは別のものである。それは幾何学であり、建築である。それを定義するのは石ではなく、その固有の意義で石を豊かにするのが伽藍である。その石は伽藍の石であることによつて気高くされると彼は考える。こうして人々と「共同体」で結ばれていることを自覚した彼はその「共同体」の鍵として、自分の文明の本質として、このような「人間」を据え、それが自分の勝利の原理になると考えるのである。

彼は自分の文明はキリスト教的価値の相続者だと考える。かつて人間は「神」に対して平等であるという理由でお互いに平等なものと考えられた。「神」を現わすものとして、その権利に於て平等であり、「神」に仕えるものとして、その義務に於て平等であつた。このキリスト教的価値を相続するものとして自分の文明の基礎を築こうとして、彼は自分の文明は「神」から受け継いで人間達を「人間」に於て平等にしたと考える。「神」という言葉を使わないで、「人間」という言葉を使うのはサン＝テグジュペリがキリスト教の信仰を持たないからであろう。又人間が「神」の大使として互いに尊敬を払うというキリスト教的価値を受けついで、自分の文明は個々の人間を通じて人間に対する尊敬を樹立したと彼は考える。又「神」に於て人間は兄弟であるという友愛関係をうけついで、自分の文明は人間を「人間

」に於て、兄弟にしたと考える。又キリスト教的価値に於て、慈善とは個人を通じての「神」への施物であつたことから、自分の文明はそれをうけついで慈善を個人を通じての「人間」に対する施物としたと彼は考える。又キリスト教的価値に於て、人間は「神」の大使であり、「神」への途上にある「神」の使者と考えられることから、自分の文明はそれをうけついで、謙讓即ち自己を通じての「人間」に対する尊崇を説いたと彼は考える。又「神」への愛が人間を相互に責務あるものとし、希望を美德の一つとして課した。そこから絶望する権利はなく、他人を救済するのは「人間」を救済することだという考えがくる。又自由とは種子の力の及ぶ範囲における樹木の成長の自由であり、「人間」の上昇の風上なのだと考える。このように彼は自分の発見した「共同体」の基礎として「人間」を据え、そこからよつてくる平等、人間相互の尊敬、友愛、慈善、謙讓と自尊、絶望の否定と人間相互の救済の責務及び自由を「共同体」の特色として考察するのである。

ここまでくれば彼の思考の輪は終りに近づくわけだが、最後に彼はこの「人間」を中心に置いた「共同体」を支える柱として犠牲ということを主張する。全き「存在」を自分のものとして要求するためには先ずそれを自身の内に根拠づけなければならぬ。しかも国家の觀念のない所には如何なる言葉を以てしてもこれを移植することは出来ない。人が自分のうちに根拠づけ得る「存在」は実行に頼る以外にはない。「存在」は言葉の帝国ではなく、実行の帝国だ。そしてその行為には犠牲という名が与えられるのだと彼は考える。犠牲とは人が自分のものとして要求する「存在」に対して自己を施与することである。一つの地所の如何なるものを理解出来るのはそれを救わんがために奮闘し、それを美化せんがために難儀し、そのために自己の一部を犠牲にしたものに限るのである。それでこそ彼の心にはじめて地所に対する愛情が生れるのである。一つの地所とは利益の総計ではないのであると。ヒューマニズムは祖先の遺産である「神」への尊敬とこの尊敬を根拠とする人間関係の高貴さを救うために努力はしてきたが、この犠牲の主要な役目を等閑視し、「人間」を実行によらず言葉によつて移植しようとしたとし、こうして祖先の遺産が次第に失われて行つたのであると彼は考える。そして母が乳の施与によつて子を育てるように、犠牲によつて「人間」を基礎とする「共同体」を支え、復興せねばならぬと説くのである。このように見てくるとこの「戦う操縦士」という作品は極めて宗教的と言わねばならない。アラス上空で彼の到達した洞察は前に見てきたように極めて宗教的であるし、その洞察から発展する彼の見解も極めてキリスト教的であると言わねばならない。サン＝テグジュペリ自身はキリスト教の信仰は持

たないと言っているが、彼のとなえる「人間」は「神」とおきかえてもよいものであり、この作品は極めて宗教的な作品であると言いうると思う。そして最後の章では又基地があわただしく移転する様をえがいてこの作品を閉じている。